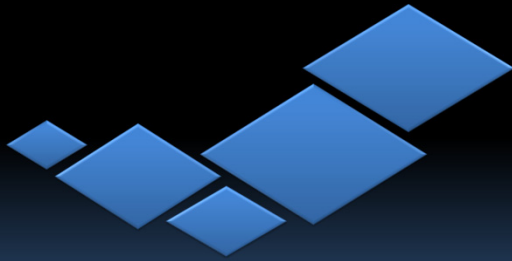




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第7号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2010-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73492
Type	journal
File Information	DRFmonthly_7.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第7号

No. 7 August, 2010

【特集1】突撃！隣のリポジトリ事業！
【特集2】ポータル研修講師による座談会

その他の記事

リポジトリ技術の豆知識 (OAI-PMH)
あなたのお仕事何ですか？

特集1 突撃！隣のリポジトリ事業！

今年度の計画は順調に進んでおられますか？ 本特集では機関リポジトリ新規構築館の方々へ今年度の意気込みを語っていただきました。また、新規構築館の方々が気になっている他機関の取り組みを、実際に取り組んでいる機関の担当者に伺いました。皆さまの今後の取り組みの参考になれば幸いです。

2010年度 の 抱負



茨城大学

[H20.4.1公開]

今年NIIのCSI事業に採択されたので紀要の電子化を行う予定です。この事業によって大幅にコンテンツが充実することをめざしています。また学内PR活動にも力を入れていきたいと思っています。

図書館業務のなかにリポジトリ関連業務を組み込み、大学内に周知し、コンテンツの件数を増加させること。
担当者不在の期間があり、リポジトリの公開はしているものの、コンテンツ登録数がなかなか伸びなかった状況からすこしでもぬけだしたい、ということで、まずはここから！という目標を書きました。

ToRepo

富山大学

[H20.3.9公開]



大阪市立大学

[H22.4.1公開]

CSI事業を無事、完遂し、NIIと国会図書館との協力体制をアピールし、日本の学術情報流通の中で本学も活躍しているということを内外に示すこと。

研究紀要創刊号から3号までリポジトリに登録していますが、紀要のみでなく、授業用の資料等もリポジトリに登録できるよう学内の理解を求め、PRしていきたいと考えております。

OCEAN
IPU REPOSITORY

環太平洋大学

[H21.4.1公開]



龍谷大学

[H22.6.1公開]

- 1) 博士学位論文のリポジトリ登録の義務化のルールづくり
- 2) 教職員向けリポジトリ説明会の実施
- 3) 学内でのリポジトリ業務の仕組み構築、業務手順、業務量の把握
- 4) リポジトリのEnglish.VerのWebページの充実化等、英語化対応
- 5) リポジトリ運営委員会の設置(全学体制へ)

昨年度で紀要論文の登録は一通り終了しましたので、今年は校内の研究成果等を幅広く収集しようと思っています。具体的には、各センターが出すセンター報や、公開講座の資料等です。それらをリポジトリに収録することで外部に情報発信することはもとより、その利用状況を分析することで、外部から見た津山高専の強みや求められていることを理解する助けになればいいと思っています。



津山工業高等専門学校
TSUYAMA National College of technology

津山工業高等専門学校

[H21.4.1公開]



独立行政法人
国際協力機構

[H22.4.5公開]

欧米のハーベスターへのハーベ스팅。いまやNIIへの登録が終わったところですよ。

公開中のコンテンツは紀要論文のみですので、将来的には他大学のように学位論文や教材、紀要以外の学術論文等、幅を広げていければ・・・、また執筆者によるコンテンツ登録も・・・と思いますが、全学的な協力が必要ですし、まだまだこれから、というところですよ。

その他
こんな声もありました

気になる取り組みの裏側 教えちゃいます！

業績DBとの連携

北陸先端科学技術
大学院大学
寺田 美樹さん

JAIST 学術研究成果 リポジトリ

新規構築館さんの新しい取り組みを楽しみにしています！

連携の経緯 教員が業績DBに論文情報を入力する際に論文ファイルも登録することで、リポジトリへの論文登録を促進する。また、リポジトリの継続的な運用のため、論文の登録作業の効率化を図ることを目的に業績DBとの連携を行いました。

システム拡張 業績DBシステムにリポジトリ登録確認の画面を追加し、リポジトリ登録に必要な情報の入力(出版社、キーワード、アブストラクト等)及び論文ファイルのアップロードができるようにしました。また、登録されたデータと論文ファイルをリポジトリ管理者が一括ダウンロードできるようにしました。画面や機能の詳細は、以下の資料をご覧ください。(ポスターp.2-3) <http://hdl.handle.net/10119/9019>

連携して良かった これまでリポジトリへの論文登録確認、論文提出受付はメールで行っており手間がかかっていましたが、業績DBとの連携により論文収集作業やリポジトリ登録作業が軽減できた点が良かったです。

頑張ります 現在、リポジトリへの論文登録率は2割ほどなので、今後、登録率を上げられるよう取り組んで行きたいと思っています。

著者へのインタビュー

(右端)小樽商科大学
南 絵里子さん



IRの仕事は、確実に教員との距離を近くし、相互の理解を深めることに大いに寄与していると思います。新規構築館さんとも、これから情報交換させていただきます！

工夫 インタビューは、Barrelチーム全員が交代制で行い、以下のような、いつも決まった5つの質問をしています(新任教員インタビューを除く)。(1)登録〇件目の論文の内容(2)該当研究を始めたきっかけ(3)現在の研究について(4)期待するBarrel読者像(5)Barrelについて意見、感想。また、1000件毎の記念インタビューは、著者と図書館長との対談形式で行っています。

スタート 2008年1月に、収録文献が100件を突破したことがきっかけです。

対象者 収録文献100件ごと、ダウンロード〇万件目を記念するなど、機会を捉えて、該当論文の著者にインタビューしました。また、今年度は新任教員に登録記念としてミニインタビューを行いました。

良かった よかったことは、インタビュー自体が教員や大学全体を広報する有効な手段となっている(インタビューは毎回、大学公式ブログ「商大くんがいく！」で紹介されている)ことと、教員の研究内容や論文の内容、図書館やリポジトリに対する率直な意見、感想を直接聞くことができ、オープンアクセスや図書館活動への理解を深めてもらう絶好の機会となっていることです。

サブジェクトリポジトリ

教育系サブジェクト
リポジトリポータル

東京学芸大学 高井 力さん

学内合意や、コンテンツの収集などの基本をおさえた上で、それぞれの機関の特色を生かしたリポジトリの構築を目指していただければと思います。

経緯・目的・運営体制 さまざまな大学のリポジトリに散在する教育に関するコンテンツを教育独自の主題から検索できるようにすることを目指しています。本学の特色から、構築当初より教育系サブジェクトリポジトリの構築を検討していました。国立教育系大学でも、何か連携ができないか協議し、教育関連コンテンツに主題情報を付与する記述指針を作成しました。現在、協力機関として5大学が基準に基づきメタデータに主題情報を付加しており、本学でそのメタデータを収集し、一括して教育独自項目からの検索を可能としています。

連携の工夫 協力してくださる機関でシステム改修が不要なように、標準的なプロトコルを採用し、メタデータ項目の新設なども行いませんでした。教育主題情報は、既存の項目に記述するようにしています。

魅力 大学の特色を出せることがサブジェクトリポジトリの魅力ではないかと思っています。

苦労しています 本学でハーベスタを運用しているため、メタデータ収集時のエラーなどで苦労しています。また、教育系として特色のあるコンテンツをいかに集めるかと言うことも悩みの種です。

コンテンツ収集戦略



長崎大学
澤村 俊祐さん

NAOSITE
Nagasaki University's Academic Output SITE

先生方との地道でこまめなやり取りが、コンテンツを集める一番の近道です！

論文の登録許諾を効率化 文献情報データベースSCOPUSのアラート機能(Eメールで情報を通知してくれる設定サービス)を活用して、週に1度、最新論文情報を収集しています。最新のものは先生の意識がその論文に向いているので、当該論文ファイルの所在がつかめているようなので、高確率で返事をいただけます。

データ入カマニュアル 人事異動で担当者が変わる場合や、アルバイトや外注で請負わせる場合など、マニュアルを見れば分かるように、項目の説明や登録資料種別毎の記載例を多く載せています。また、入力の大きな目安となるJUNII2ガイドラインが公開された際には、対応してマニュアルを一部更新しました。

コンテンツ増の秘訣 まずは紀要類をしっかり抑えることが大切だと思います。電子的公開を可能とする投稿規程の整備を含め、編集委員会と綿密に連携することが必要です。また雑誌論文などは、SCPJや出版者のホームページ等で著作権方針が確認できない場合も、諦めず直接出版者に問い合わせることで登録できることがあります。

共同IR・HARPの勉強会

HARP



広島大学 尾崎 文代さん

リポジトリは生まれてからがスタート！ご近所づきあいってありがたいな～。

勉強会の内容 2006年から年2-3回のペースで行っています。著作権・コンテンツ収集・登録実習・構築プラン策定・システム研修・最新動向・県外からのゲスト講演等、意外とネタ切れしません(^.^)。

今後の予定 この9月には初心者向けの講習会を開催します。これまでは主にホスト機関(広島大学)が講師をしてきましたが、今回から参加機関が講師です。人材が育ってきていることを実感！ちなみにHARPIは、ローカルなDRFを自称しています。

やって良かった 共同リポジトリ構築に向けた全ての局面を共有してきたことによる連帯感、やはり強いです。各館の構築プランを全員で考えた2007年の勉強会で、みんなの意識が前向きになったのを感じました。「苦労」ではないですが、このモチベーションの維持・継続が、いつも気になっていることの一つです。

名古屋工業大学学術リポジトリ

博士學位論文の登録



(右端)名古屋工業大学 林 和宏さん

作業の流れ カレント分は、博士論文提出時に学務チームの協力を得て、許諾確認をとっています。許諾分は、本人へ本文データの送付を依頼(なければ図書館でスキャン)し、図書館で著作権処理・メタデータ入力し、登録しています。遡及分は、著者となる卒業生へ郵送で許諾確認をとり、後ののがれは同じです。

許諾率UP 最初は、博士論文の提出時に図書館からの依頼として、リポジトリ登録の同意書様式を渡していましたが、登録の許諾率はよくありませんでした。そこで、同意確認書を博士論文提出時の必要書類リストに加えてもらうことしました。小さな違いのようですが、これで回収率がかなりアップし、許諾率もアップしました。

博士論文は登録に手間がかかりますが、その分必ず喜ばれますよ。

新しいつながり 博士論文をリポジトリで読んだ他大学の学生が声をかけてくれたという先生がいました。リポジトリを介して、新しいつながりができ、更に研究が発展していくということが一番嬉しかったことです。著者の中には博士論文が、今の論文と比べると拙いのでそれをWEBで公開するのはなあと思える方もいました。そんなときは、先の例を述べて是非登録をお願いしています。

【特集2】わいわいランチ@名古屋 ポータル研修講師による座談会

今年も国立情報学研究所の学術ポータル担当者研修が開催されました。名古屋会場（名古屋大学附属図書館）2日目のランチタイムに、講師陣8人で座談会を行いました。その模様を裏話満載で（?!）お送りします。

土出：3日間の日程も半分まで来ましたが、講師のみなさま、いかがですか。

大園：実務は、他の講義と関連するところが多いので、兼ね合いが難しかったなあ。

野中：僕は同じ講義で2年目だけど、今年は講師陣全員参加のMLを作って事前に全てのコマの講義資料に全て目を通せたので調整しやすかったな。

大園：それにしても、毎度のことながら、前に立ったら汗かく。

全員：うんうん。

守本：スライドをoffice2010で作って、いろんな効果を盛り込んでみたら、2007ではうまく表示されなくてちょっと残念。あと、つつい脱線話が増えちゃった。

土出：いろいろ話したくなりますよね。受講生の方の反応はどうでしたか？

大園：システムは、ちょっとぼかーんとしてるかんじ。

野中：そんなもんじゃない？ と、僕は自分にいいきかせて、気にしないようにして乗り切るようにしてます。

守本：後ろで見てたけど、システムの聞きなれない言葉続出だったのに、寝てる人がいなかったよ(笑)

大園：午後いちの講義あたりが厳しいかも？

永井：寝てたら「こらっ」て言おう。(笑)

(注：寝てる人は誰もいませんでしたよ！)

土出：今回初講師の方にお伺いしましょう。ご担当のコマはこの後ですが、準備などについて。

大澤：東京会場担当の神戸大・中山さんが去年も講師をされていたので、アドバイスもらいました。CSIの報告交流会でオフライン打ち合わせしたり。実習なので問題に適切な事例を探すのに苦労しました。日本の学協会が特に…。後は、実習問題に取り上げた出版社のポリシーが、研修終了までに変わらないことを願ってます。

岩井：今回登録実習ではUsrCom¹⁾を使うけど、帰ってから復習できるのはやっぱりいいな。UsrComのDSpaceの項目設定はほぼデフォルトだったので、実習上で必要な項目カスタマイズを、業務に即しながらいろいろ考えました。

濱：サーバは千葉大さんにあるので、実際の設定には大変お世話になりました。

岩井：著作権実習とかもそうだろうけど、実習は、実際のところ受講生の皆さんがどのくらいのスピードで作業できるかわからないから、ちょっとどきどきする。

濱：去年は受講生で、まだリポジトリを全然触っていない状態で受講したので、初めて聞く言葉だらけ。登録も、なにをどこに入れたらいいのかわからない。「単にコピペ」と言われてもわからなかったりした。できるだけ受講生の方のハードルを下げたいです。

大澤：メタデータの入力方法も、「基本はローカルルールで

大澤：OK」と言われてもやっぱりどこかに拠りどころがあると(続) 嬉しいよね。「junii2ガイドライン」とか「学術コンテンツ登録システム」のデータ記述マニュアルとか。

永井：4年前に僕もポータル研修を受けたけど、当時はまだリポジトリが広がり始めたところで、受講生はよくわかってない人ばかりだった。今はだいぶ普及してきて、自分より知っている人も、全く初めてで知らない人も。資料作りながら、こんな基本的なことは不要かも…と思ったり、でも知らない人もいるか…と思ったり。

野中：構築済み、未構築の機関、新しく担当になった人、これから構築を任された人などいろいろいるから、難しいよね。特にシステムの話は。

土出：受講生の方からの質問なども、早速ありますね。

守本：紀要の掲載許諾については一括許諾もあるっていう話をしたら、あとで受講生の方から質問しました。実例と、実際にやって問題ないのかどうか。

土出：紀要の編集委員会に提案はしています。一括許諾を採用される場合と見送られる場合はもちろんあります。

複数：本学でも実施例があります。

永井：メタデータ概論の講義で受講生の方から「リポジトリのローカルメタデータ項目をどう設計してるのか」という情報を集めたサイトが欲しい」という意見がありましたね。

野中：DRFwikiなんかにあるといいですね。DRFwiki、もっといろいろコンテンツ増やしたいですね。今回の研修の中で、どんな情報が求められているか、といったことも掘ってwikiに反映できたらいいな。

大澤：今年はMLのお陰で、講師担当者の意見交換も頻繁にできましたね。用語問題などで盛り上がった。普通

に使っていたら、DSpaceローカル用語だった。

守本：今回、受講生のアンケートに「リポジトリで分からない用語を書いてください」という質問を入れてもらったんだよね。

野中：アンケート結果をいただくのが楽しみです。

永井：あつ、そろそろ午後の部ですね。

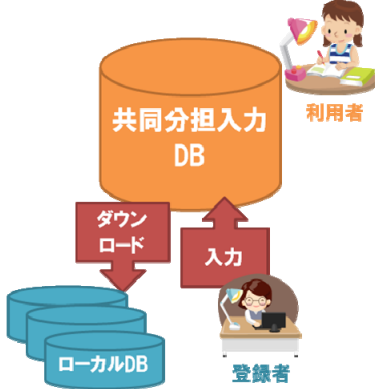
土出：永井さん出番ですね。では、このへんで。後半も頑張らましょー。

1) UsrCom: 担当者が試験的かつ手軽に機関リポジトリを体験・情報交換できるデモサイト。登録だけで誰でも使えます。
<http://usrcom.ll.chiba-u.jp/>

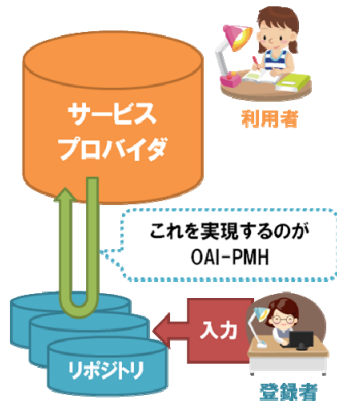
参加者：守本(コンテンツ収集)・大園(システム概論)・野中(メタデータ概論)・永井(事例報告:システム)・大澤(著作権登録実習)・岩井(登録実習)・濱(登録実習講師補助)・土出(グループ討議コーディネーター) ※敬称略プログラム順



NACSIS-CAT



OAI-PMH



NIIのJAIRO^{*2}は、国内の機関リポジトリ(IR)のコンテンツを横断検索することができます。これを実現している技術がOAI-PMH(おーえいあい・ぴーえむえいち)です。

OAI-PMHは、NACSIS-CATのように中央のデータベースに直接入力するのではなく、個々のIRの書誌をサービス提供者(サービスプロバイダ)が自動収集、登録する仕組みです。サービスプロバイダは、JAIROの他にOAIster、Scientific Commons、Scirus、NDLTDなどがあります。

OAI-PMHのおかげで、個々のIRのデータは複数のサービスプロバイダを介して利用が可能となり、登録文献のビジビリティアップにつながります。

^{*1} Open Archive Initiatives Protocol for Metadata Harvesting

^{*2} Japanese Institutional Repositories Online

もっと詳しく知りたい方は

・学術ポータル担当者研修講義資料

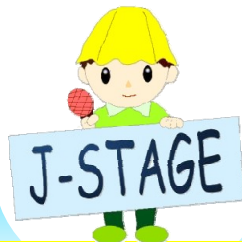
(<http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/portal/result.html>)

・DRF startup

(<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?startup>)

記事作成協力 大園隼彦(岡山大学附属図書館)・野中雄司(北海道大学附属図書館)

あなたの
お仕事
何ですか？



電子ジャーナルサイト「J-STAGE」の

運営をしています



J-STAGEにおいて、弊機構は事業全体の運営とシステム運用を行っています。コンテンツは発行機関がそれぞれのポリシーで作成・掲載しています(著作権等も原則として発行機関にて担保)。この意味で発行機関(学協会)さんと弊機構がいわば車の両輪となって運営されているプラットフォームがJ-STAGEです。システムの管理運用のほか、発行機関との連絡・調整や電子化についての意見交換、またセミナーなどを通じての情報提供やアドバイスなどにも力を入れています(写真はセミナーの様子です)。

また、電子ジャーナルサイトであるJ-STAGEでは内外の学術情報サービス等とリンクなど連携を強化していくこともたいへん重要です。こうした連携の企画・交渉なども行っています。

苦労していることは？

コンテンツも、参画機関数も、そしてシステム規模もかなり大がかりな事業に成長しているので、それらの調整が大変です。限られた資源を効率的に活用して、閲覧者・発行機関双方のご要望に、できるだけ多くこたえてゆきたいと思っています。

今後の展望は？

J-STAGEもスタートから10年が経過し、現在システムの全面リニューアルに向けて新バージョンとなる「J-STAGE3」を開発中です。機能面においても、使いやすさの面でも、世界トップレベルのサイトを目指していきます。

リポジトリ・OAの活動についてひとこと

学術情報が電子化されていく中で、J-STAGEのような電子ジャーナルサイトと機関リポジトリが、互いの長所・利点をうまく伸ばしながら、上手に利用しながら、Win-Winの関係になってゆけばよいと思いますし、またそうならなければいけないと思います。

J-STAGEではコンテンツの著作権は発行機関にあるというのが基本原則ですが、このあたりの展開はオープンアクセスの動向とも深く関わってきます。こうした視点から、J-STAGEもプラットフォームとしての方向性・将来像を見据えてゆきたいと考えています。

仕事をして良かったと思うことは？

発行機関の方から、「J-STAGEのおかげでジャーナルのクオリティが向上した」と言っていたり、内外の閲覧者の方から「役に立ってるよ！」とメールをいただけたときなどは、とても嬉しいです、励みになります。

科学技術振興機構
研究基盤情報部
電子ジャーナル担当

青山 幸太さん



次号
予告

【特集1】IFLA レポート 8月にヨーロッパで開催されたIFLAについて、参加者レポートしてもらいます。

【特集2】地域ワークショップ速報 今年度もいよいよ地域ワークショップがはじまりました。

ほか、川柳をつくる

(「だ」で始まる句)等を予定

9月に開催されるワークショップについて速報します。

編集後記：秋からはイベント目白押し！どこかで皆さんとお会いできれば嬉しいな。(まさゆきまゆ)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkanrdf@gmail.com

月刊DRF第7号 平成22年8月31日発行 デジタルリポジトリ連合